人種差別をなくすためには　三年　中島　祐月

私は高校二年生の八月から一年間、留学のために一年間アメリカに滞在した。滞在したのは人口の九十パーセント以上が白人の、ミシガン州北部の小さな街だ。アメリカは人種のサラダボウルと呼ばれる多様的な社会の中で、色濃く残る人種差別問題はたびたびニュースに取り上げられる。渡米前は怖さもあったが、ありがたいことに一年アメリカに滞在して、私が人種を理由に暴力や暴言、行動の制限など、痛烈に人種差別を感じたことはなかった。

アメリカの人種差別は、アメリカという国ができた頃、もしくはできる何百年も前にまで遡る長い歴史を持つ。日々のニュースや歴史の授業から、人種差別についてはなんとなく知っていたつもりだったが、単民族国家の島国に住んでいると、なかなか人種差別というものがピンと来ていなかったということに気づいた。しかし一年の中で、毎日のほんの小さな違和感の積み重ねは、この国で間違いなく人種差別があったこと、そして今もそれは、人々の心に、他人を傷つける形ではないにせよ間違いなく存在しているということを実感させた。

私がいちばん最初に違和感を感じたのは九月、沢山の人と初めて出会った時期だ。会話を楽しくしようとして、「どこから来たか当ててみて」と聞くと、誰も答えたがらないのだ。答えたがらないどころか、そんなことは非常識だと言わんばかりに、「そんなことはしないよ。」「意地悪になりたくないからさ。」と言う。その質問に答えることのどこが意地悪になるのか私は理解できなかった。今ならどうしてか分かる。アジア人のことをみんな中国人だと思うことが、アジア人差別のテンプレートだからだ。

次に感じたのは、距離の近い友達ができ始め、お互い気を使わずに言いたいことが言えるようになった時期だ。ある女の子が、「あなたたちって犬を食べるの？」と聞いた時、周りは「人種差別だ！」の嵐だった。そのときはアジア人は犬を食べるという偏見が、典型的な差別ということはなんとなく知っていたから、彼女が責められた理由も分かったが、それでも私はこんなにも非難を受けることに違和感を感じた。彼女の人柄から、彼女が本当に知らなくて質問したことを、私は分かっていた。その他の場面でも、「アジア人は犬を食べる」というフレーズは、放送禁止用語よりも禁止されているような雰囲気だった。彼らはまるで犬を食べるなんて酷い行為は白人が作り出した差別的な偏見だと言わんばかりだ。私が違和感を感じたのは、私は犬を食べないにせよ、犬を食べることは本当に一部の地域では文化だからだ。もしそれが私の文化だったら、人種差別をしないための彼らの行動は、もっとも人種別的な行為になってしまうのではないか。長らく滞在して分かったのは、白人の誰もが、相手の気持ちを傷つけることよりも、人種差別主義者になってしてしまうことを嫌がっていて、その結

果必要以上に人種を意識し てしまっているということだ。 しかし人が話題にしたくないことほど、そ のことについて話すのは楽しい。特に高校生 となると、体裁を気にせず本心を語ってくれ る人も多くいる。 そうやって私が人種にオープンになると、 みんなも自分の人種のことを話し始める。面 白いと思ったのは、白人は白人でもそのルー ツは多様であることだ。遠い先祖がドイツ人、 フランス人、イギリス人、その他色々だった り、ほんの二世代前がアイルランド人だった り、メキシコ人だったりする。日本人はほぼ みんな百%日本人だと教えると、みんな驚く。 他の人のルーツについて話したり、人種に乗 っかって冗談を言ったり、みんなのアジア人への誤解を解いたり、私はそうやって多様性
を感じる瞬間が大好きだった。
でもやはりそれは全員が楽しめることではない。こちらの会話で笑いが起きたことを他の人に話すと、若干引かれたりする。「そんなこと言ったらだめだ。」と言われたこともある。時にはなぜ駄目なのか到底説明がつかないものまであり、それこそ違和感を感じるほどだった。彼らの中では、人種の話をすること、私をアジア人と呼ぶこと自体がタブー化されているのだ。
タブー化については、賛否両論あると思う。触れないと言う行為は、無意識にその人を傷つけてしまうことを避ける絶対的な方法だ。でも私はタブー化は一定数の人々の差別心を促進してしまう可能性もあると考える。私に「アジア人は犬を食べるか」聞いた彼女が、タブー化によって人種を話題にすることに躊躇うようになれば、彼女は一生誤解や偏見を持ったまま生きていくことになる。そのまま固定観念を持つ大人になってしまうと、彼女と他人種との間には、埋められない隔たりができてしまう可能性がある。触れないという行為は、もっとも固定観念の形成を助長しやすい行為でもあるということだ。
また普段話題にできないことを冗談にするのは、全員に受けるわけではなくても、ある種の人間には爆発的に受ける。それを証拠にコンプライアンスを無視した発言をする動画配信者は、今日一定数の登録者を誇る。特定の視聴者層のみにコンテンツを届けやすいネットのおかげで、そういった行為はこの時代顕著になっている気がする。そしてそれは人種差別においても同じだ。アメリカのネットカルチャーに足を踏み入れ見えたのは、人種差別的なコンテンツ、そのコメント欄に飛び交うおびただしい数の差別ワード。私が日常で感じる少しの違和感などではなく、明白な悪意。私たちが人種にオープンになればこれらの差別がなくなるとは言えないが、現実でタブー化されているからこそ、ネット上の発言が沢山のいいねを集めることは事実だと思う。それに私はそもそもタブー化されていることに不快感を感じる。私が本当に嫌だったの
は、常識人たちに、人種的少数派は守らないといけない存在のように扱われたときだっ

た。

私は私をアジア人と呼ぶこと、ましてアジア人であることをタブーにして欲しくない。私は高校という環境で、高校生としてアメリカに行けたことは幸運だったと思う。アメリカの高校は、日本でいう中学二年生から、高校三年生までが所属している。最高学年の十二年生がほぼ大人であるのに対して、一番若い九年生はまだ世界への固定概念が出来上がっていない。世界に対して素直だ。だから彼らは、上級生のように罪意識を感じることなく、私と人種について話すことができるのだと思う。九割以上が白人の学校に通う彼らに、固定概念が出来上がる前にアジア人として、日本人として接せたことは自分にとって も彼らにとっても、貴重な体験だったと思う。 それでもアジア人差別について調べると、 アジア人はもっと差別と戦うべきだという声 を多く見る。もちろん不快に感じるような発 言には、自分がどう捉えたかを伝えるように はしていたが、私は田舎町の高校という、小さな世界の中で平和ぼけしていただけかもし れない。私が見たのは多様的なアメリカ社会 のたった一部だということも理解している。 しかし「戦う」という、攻撃的な意識を持つ ことは、必ずしも差別解消に直結するとはい えないのではないか。 ネットで悪意を持って人種差別をしている 人々は、その人種の友達がひとりもいないのかと考える。もしひとりでも大好きな友達が いれば、悪意ある差別をしようとは思わない だろう。私はそんな「アジア人の友達」にな りたい。生まれ育った環境の中で人種に対しての意識は消えないかもしれないが、どうせ ならアジア人と聞いたときに、「差別されて きた人たち」というネガティブなイメージで はなく、私を思い出してポジティブなイメー ジを持ってほしい。そして留学生たちは、世 界中でそれができるすごい人たちだと思う。 人種問題は複雑で難しい。結局何が正しいか分からず、とりあえず人種の違いなんて存在しないかのように振る舞ってしまうのも理解できる。しかしやはり人種は無視できない と思う。個人の全てのバックグラウンドを作 っているものだからだ。 大切なのは、相手と自分との違いを「無 視」するのではなく、認めた上で尊重していくことだと思う。それは人種だけでなく、宗 教、文化、価値観、地球上にいる沢山の「違 う」人々と、違いを超えて健全な関係を築いていくことに繋がると私は信じている。